＜研究室活動報告＞

宮城県山元町における調査実習活動報告

藤田悠佑*

1.　はじめに

今回で３年目となる山元町調査実習であるが、今回は「3.11 後社会を生きる山元町の勤労青年と高校生の『声』を聴くことを通して、被災地の現状を理解する」ことをテーマにしたヒアリング調査を中心として行われた。本テーマは、震災復興を目指して様々な取り組みが行われている山元町において、昨年度行った山元町内に居住する中学生へのヒアリング調査（彼らが何を感じ、将来にどのような希望を持っているのかについて、彼らの「声」を聴くことを目的とした調査）を受け、さらに上の世代である高校生や勤労青年について同様に彼らの「声」を聴くことを目的として設定された。また、被災地の若者世代の「思い」をより深く理解することによって、彼らをより多角的に捉えていくことができると考え、3.11 の被災当時は中学生であった高校生や、当時から働いていた若者たちが、その時何を感じたのか、現在の山元町についてどのように感じているのか、そして、そのような人々にとって課題や希望とは何であるのかについて、彼らの語りを通して理解することを目的としている。

2.　調査実習概要

2－1. 調査実習スケジュール

≪8 月 1 日（土）≫

13 時～14 時　山元町中央公民館訪問
　　森憲一教育長から山元町の被災状況の説明
14 時～15 時　坂元区新市街地造成現場見学
　　鴻池組技術者　永井氏からの説明
15 時～17 時　町内調査実習（1）
　　旧中浜小学校見学
　　高台から浜側被災地を概観
18 時～20 時　「土曜日の会」の定例会参加（普門寺）

≪8 月 2 日（日）≫

10 時～10 時 40 分　「やまもと子どもも大人も遊び隊」参加（山元町中央公民館）
10 時 40 分～12 時 20 分　生涯学習課岩佐氏へのヒアリング調査（中央公民館）*

---

* 人間学群教育学類 4 年
** ヒアリング調査は、調査の趣旨を伝えた上での非構造化面接の形式で 3 回とも行った。

12 時 20 分～　「やまもと子どもも大人も遊び隊」に再度参加
15 時～17 時　山元町青年倶楽部「翔」のメンバー３名へヒアリング調査（中央公民館）
17 時～19 時　町内調査実習（２）
　　みんなの図書館見学
　　花釜地区散策
19 時～20 時　山元町議会報告会参加（中央公民館）

≪8 月 3 日（月）≫
10 時～12 時　山元町在住の高校生へヒアリング調査（中央公民館）
12 時 15 分～　きみつ少年少女合唱団復興応援コンサート観覧
12 時 30 分～13 時　ＦＭりんごラジオからインタビューを受ける

2－2. 調査実習参加者

人間系教授	手打明敏
人間学群教育学類 3 年	滝見凌矢
同	田崎智也
同　　4 年	藤田悠佑
社会国際学群社会学類 4 年	村上美羽
体育専門学群 4 年	羽田智香
北海道大学教育学部 4 年	吉田紗紀
人間総合科学研究科博士前期課程 1 年	丁甜甜

3.　調査実習詳細

3－1. 山元町中央公民館（森憲一教育長）

はじめに、森教育長から山元町の現状についてお話しいただいた。人口減少や高齢化が山元町を始めとする被災地域の課題であること、山元町で推進されているコンパクトシティ計画の状況、被災後に全国から 115 名（山元町全職員の約 40%）もの復旧専門の派遣職員が駆けつけてくれたことなどを確認した。

3－2. 坂元区新市街地造成現場（鴻池組永井氏）

山元町では復興に向けて、コンパクトシティ化が進められている。コンパクトシティとは、駅や病院などを核として、その周辺に集落を集約化することで、コミュニティの活性化や行政コストの効率化を図ろうとするものである。山元町では現在、新山下駅周辺地区、新坂元駅周辺地区、宮城病院周辺地区の３地区で、コンパクトシティ化に向けた宅地造成が行われている。私たちはその中の一つである坂元地区の新市街地を見学した。地盤整備は大詰めを迎えており、

徐々に住宅の建築が始まっていた。しかしながら、駅周辺の商業施設用地はそのほとんどで利用未定地であり、今後の商業施設の誘致が課題となっている。

図１　建設中の坂元新市街地

図２　旧中浜小学校の屋上から

3－3. 町内調査実習(1)

森教育長とともに、旧中浜小学校を見学した。旧中浜小学校は海のすぐそばに立つ小学校であり、その遺構は津波の被害を如実に物語っている。現在、震災遺構として残すべきかどうかを検討しているとのことであった。議論においては、多額の維持費用がかかる点や、保存するにしても手を加えずに風化する

に任せるべきという案などがあるという。震災時に児童や教師、保護者などが避難した屋上にも上り、仮設トイレ跡などの説明を受け、当時の緊迫した様子が感じられた。

その後、磯浜などの高台から浜側の被災状況を確認した。宮城県沿岸をつなぐ護岸工事が進んでおり、高い防波堤が浜辺を覆い尽くすように建設されており、なおも工事が進められていた。

3－4. 土曜日の会

普門寺で開催されている「土曜日の会」の会合に参加させていただいた。土曜日の会とは、毎週土曜日 18 時に山元町のお寺、普門寺に集まり山元町の復興のために情報収集・勉強しながら意見交換をしている住民組織である。会合では、土曜日の会が実施した住民アンケートの結果をどのようにまとめ、行政へ提出するかについてが話し合われていた。「何を抽出するか」「どこに提出するか」といった方法について活発な議論がなされていた。また、ニュータウンやみなし仮設といった山元町の現状についても共有がなされていた。

3－5. やまもと子どもも大人もみんなで遊び隊

「やまもと子どもも大人もみんなで遊び隊」は、「家庭・地域・学校が協働して子どもを育てる協働教育の場として『子どもたちにいろいろな経験をさせたい、遊ばせたい。大人だっていいとこ見せたい、遊びたい。』」をコンセプトに山元町中央公民館で開催される、地域のお祭り

である。主な内容は、「地域住民（子どもから高齢者まで）と教職員によるボランティアが中心になり、体験ブースや音楽発表のステージなどを企画運営」となっている。「子どもも大人もみんなで遊び隊実行委員会」が主催し、2003 年（平成 15 年度）に山元町教育委員会生涯学習課の事業として開催され、現在は共催となっている。

私たちも参加し、子どもたちとともに出店の山元町の特産物を食したり、地元の方の指導の下で切り絵や染め抜きなどの体験をしたりした。様々なミュージシャンや、静岡から来たピエロなど、多くの人々の協力で開催され、子どもたちや若者の姿も多く見られ、非常ににぎわっていた。

図３　やまもと子どもも大人もみんなで遊び隊

3－6. ヒアリング調査（1）岩佐氏

ヒアリング調査１回目は、山元町生涯学習課社会教育主事である岩佐勝氏に対して行った。岩佐氏からは山元町民の被災意識や、自身の活動、山元町における社会教育分野の取り組みについて伺うことができた。また、齊藤生涯学習課長も途中加わられて、詳しい被災状況などを説明いただいた。岩佐氏は校長職を退いた後に現在の職に臨時的に採用されており、現状１名かつ今後新たな社会教育主事が見つからないといった、山元町が抱える社会教育分野の人材不足といった問題が明らかとなった。

3－7. ヒアリング調査（2）山元町青年倶楽部「翔」

続いて、山元町の青年倶楽部「翔」のメンバー３名へとヒアリング調査を行った。「翔」とは、山元町の青年団体であり、町のジュニアリーダー（小学生のキャンプを企画・引率する高校生のボランティアグループ）のＯＢ・ＯＧ会として、30 年ほど前から組織されてきた。時代によって活動内容も様々であり、かつては演劇や青年海外協力隊などに取り組んでいた時期もあったが、近年では地元の仲間で集まり、屋台を出すなどの活動になっていた。しかし、震災を機に若者の力を活かそうという思いが高まり、山元町に関わる若者を広くメンバーとして募集したり、ワークショップを開催するなどして、町へと還元できるような活動を目指している。現在メンバーは15 名で、その内５名がジュニアリーダー外の若者である。

ヒアリング調査に協力して下さった３名の方の内、２名は山元町出身で、町のジュニアリーダーを経て「翔」へと加入しており、現在も山元町あるいは隣町で働いている男性であった。

そしてもう１人は、埼玉県出身であり、震災後のボランティア活動を通じて山元町と関わりを持ち、会社を辞めて山元町へ移住し、現在農業を営んでいるという男性であった。調査では「翔」という団体の活動や意識を始めとして、若者から見た山元町のコミュニティの現状、若者の意識、町の課題などについて聞くことができた。

3－8. 町内調査実習(2)

２日目は、「みんなの図書館」を見学した。「みんなのとしょかん」は、災害によってコミュニティの維持・再生が困難になった地域、過疎化の進む地域に私設の図書館を設置することによって、コミュニティの醸成を促すことを目的としている全国的なプロジェクトである。私たちが訪れると、先日訪問したという中国の大学教員から寄贈された本が置かれていたりと、様々な人が訪れていることを実感した。

その後、館長さんとともに図書館近辺の花釜地区を散策した。家が土台ごと水平移動してしまった家や、何名かの児童が犠牲となった保育園などを見て回り、津波の被害の凄まじさを改めて認識するとともに、その地域に住む人のその地域への想いを感じ取ることができた。

図４　花釜地区散策のようす

3－9. 山元町議会報告会

偶然にも山元町議会報告会が開催されるということで、見学のために再度中央公民館を訪れた。報告会は２日間で町内の４か所で行われており、常任委員会、特別委員会の報告の後、質疑応答、「復興のまちづくり」と「議員定数と報酬」をテーマとした意見交換会で会は構成されていた。私たちの他には、町議会議員が５名と地域の方が５名ほど参加していた。様々な意見が出されてはいたものの、議論が噛み合わず、建設的な話し合いとはいかない場面が多く見られたように感じた。

3－10. ヒアリング調査(3)高校生

３日目には、ヒアリング調査の３回目である山元町在住の高校生へのヒアリング調査を行った。今回協力していただいたのは、山元町在住で仙台市にある高校へと通っている男子高校生の方１名である。彼からは、震災当時の様子や現在の山元町の高校生の様子、自身の将来の夢や山元町についての課題や良さなどについての話をうかがうことができた。現在ジュニアリーダーとして山元町の様々なイベント運営・企画などに携わっている彼は、しっかりと町のことを見つめ、今後の自分に思いを馳せている様子が印象的であった。

4.　おわりに

私自身、今回で３度目となる山元町調査実習であったが、来るたびに新たな発見がある。たとえば、みんなの図書館の館長の菊池氏と一緒に山元町花釜地区を散策したとき、津波で土台がずれている家などこれまでは知らなかった震災の爪痕を知ることができた。また、そこに生きる人々の想いまでもが、館長さんの語りからは伝わってきた。また、２日目の朝には、山元地区の新市街地まで自転車で行ってみた。山元新市街地も坂元区同様、コンパクトシティ化が進められている地域であり、こちらは多くの住居が立ち並び、すでに多くの人が暮らしている。町並を歩き、地域の人々とともにラジオ体操に参加する中で、確かに人が生き、根づきはじめているのだ、という実感は得たものの、画一的に整備された家々や道路は、どこか機械的でもの悲しさも感じさせた。

このような散策を通して感じた人々の生活に加え、本調査実習のテーマである若者たちへのヒアリング調査からは、非常に多くのことを学ぶことができた。青年倶楽部「翔」のメンバーへのヒアリング調査では、まず「翔」という組織の緩やかなつながりに驚いた。先述したように、近年の「翔」は、山元町へと何らかの還元をしようという試みを行っているが、必ずしもそれが「翔」の目的ではないという。「翔」のメンバーは、それぞれが自己の目的に適った「翔」の活動に参加するのみであり、山元町のため、というよりは楽しそうだから参加し、結果的に山元町のためになっている、というスタンスのメンバーが多いという。しかし、そのような目的を明確にしない組織だからこそ、多くの人々に門戸を開くことができ、それが「翔」の強みでもあるとメンバーは感じているようであった。また、ヒアリング調査に協力いただいたメンバーの内１名は移住者（以下、A氏）であり、A氏の語りは非常に示唆的であった。まず、山元町は個々が狭いコミュニティの中で完結してしまっており、町内においても他のコミュニティとの接触があまりない、ということは多くのメンバーが実感していることであった。その状況に置いてA氏は、自らの役割を新参者として多くのコミュニティに出入りし、そのコミュニティ間をつなげることに見出していた。このような既存のコミュニティ、規範に縛られない柔軟に移動できる人物は、ともすれば閉塞的で硬直的なコミュニティになりがちな地方にとって、重要な役割を担うと言えるだろう。A氏は、新規就農者としての自身についても、これからの若者のロールモデルになれればといきいきと話していた。私たちは調査実習前、被災地の若者の調査としてテーマや質問を考えていた際、A氏のような人物をほとんど想定できていなかった。しかし、確かに被災地に暮らす若者はその土地が地元である若者だけではない。その町で暮らしたい、その町のために働きたい、といった強い思いで移住してくる若者もいるのである。今後の地方を考えていくうえで、彼らのような新しいインパクトを伴って移住してくる若者たちとどのように地域は手を携えていけるのか、その在り方を考えていくことは重要であるだろう。

また、山元町に暮らす高校生（以下、B氏）の語りも非常に興味深かった。B氏は震災の経験から将来の進路を考えており、市政にも関わっていくようになっていったという。また、B

氏は私たちも参加していた「やまもと子どもも大人もみんなで遊び隊」に携わっており、その活動の中で震災を経てあまり笑うことのできていなかった子どもたちの笑顔を見れたことがとても嬉しいと語っていた。昨年度に山元町の中学生へヒアリング調査をしたときに感じた、町の身近な人のために貢献したい、という思いが高校生のＢ氏の語りからはさらに洗練され、具体的な活動をともないながら考えられているということを強く感じた。また、Ｂ氏は山元町についてここが好きというものはなく、ここで育ったという思い出、時間が好きなのだと語ってくれた。地元のためになりたい、帰ってきたいというような若者意識の背景には、このような具体的ななにかではない「過ごした時間」というものが大きな影響を与えていると言えるかもしれない。

毎年訪れる度に、店や家が増えていたり、堤防が完成に近づいていたりと、新しい姿になっている山元町。その復興の様子をこれからも継続して見つめ続けるとともに、そこに暮らす人々の想いを感じながら、調査実習を引き続き行っていければと思う。

最後に、今回の調査実習においても大いにご助力いただいた田代先生はじめ、山元町の多くの方々と、ヒアリング調査にご協力いただいた５名の方々へと御礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

5.　主要参考資料一覧

・山元町ホームページ
http://www.town.yamamoto.miyagi.jp/（2016 年 5 月 11 日最終閲覧）
・やまもと子どもも大人も遊び隊ホームページ
http://yamamotoasobitai.web.fc2.com/（2016 年 5 月 11 日最終閲覧）
・山元町震災復興土曜日の会 Facebook
https://www.facebook.com/yamamoto.fukkou（2016 年 5 月 11 日最終閲覧）
・山元町震災復興土曜日の会 Twitter
https://twitter.com/yamamoto_fukkou（2016 年 5 月 11 日最終閲覧）
・山元町震災復興企画課編（2015）「山元町の震災復興計画と事業の取組状況について～後世に誇れるまちづくりを目指して～」
・山元町事業計画調整室編（2015）「山元町　主な復興・復旧事業の進捗」